

はじめに

今から二四〇年ほど前の一七八三年（天明三）、浅間山が大噴火し、浅間山の北麓に位置する嬭恋村および周辺地域は甚大な被害をこうむりました。現在、この噴火活動の自然科学的解明と歴史学・考古学による被災の研究が進み、一言で火山噴火といっても多様な現象があり、その災害は多方面にわたり甚大であったこと、現地の人びとは救済に尽力し被災を乗り越え、復興していったことがわかってきました。

近年、日本列島では、火山噴火はもとより地震や集中豪雨などが頻発し、自然災害にどのように対処するのか、また災害後の救助と復興をどのようにおこなうかが大きな課題となっています。

かつて浅間山大噴火で、実際にどのような災害が起こったのか、被災をどのように乗り越え、語り継ぎ、復興してきたのかを、みなさんと見ていきたいと思います。



I 孀恋村と浅間山

01 高原の村・孀恋村

02 浅間山

6 8

II 天明三年の浅間山大噴火

03 噴火の実相

04 鬼押し出し溶岩と浅間山熔岩樹型

10

05 土石なだれ

06 天明泥流

07 天明泥流の記録

08 浅間石

09 降灰

コラム 絵図に見る大噴火

12 14 18 20 22 26 28

III 被災の実相

10 甚大な災害

11 観音堂の石段

12 十日の窪の倒壊家屋

13 あらわれた延命寺

14 鎌原村の馬

15 信州街道と鎌原村

30 32 36 42 46 48

16 天明泥流による被災
17 村々を飲み込む天明泥流
コラム 絵図に見る被災

50 52 56

IV 救済と復興

18 被災民の救助

19 支配者による救済・復旧

20 温泉の引湯

21 鎌原村の再生

コラム ポンペイの二人と鎌原村の二人

58 60 64 66 70

V 慰霊と語り継ぎ

22 慰霊のはじまり

23 供養碑

24 語り継ぎ

25 新たな語り継ぎ

72 74 78 82

VI 孀恋村の今

26 「高原キャベツ日本一」の村

コラム キャベツ料理事始

84 88

孀恋郷土資料館案内

「天明三年」散歩マップ

あとがき・参考文献

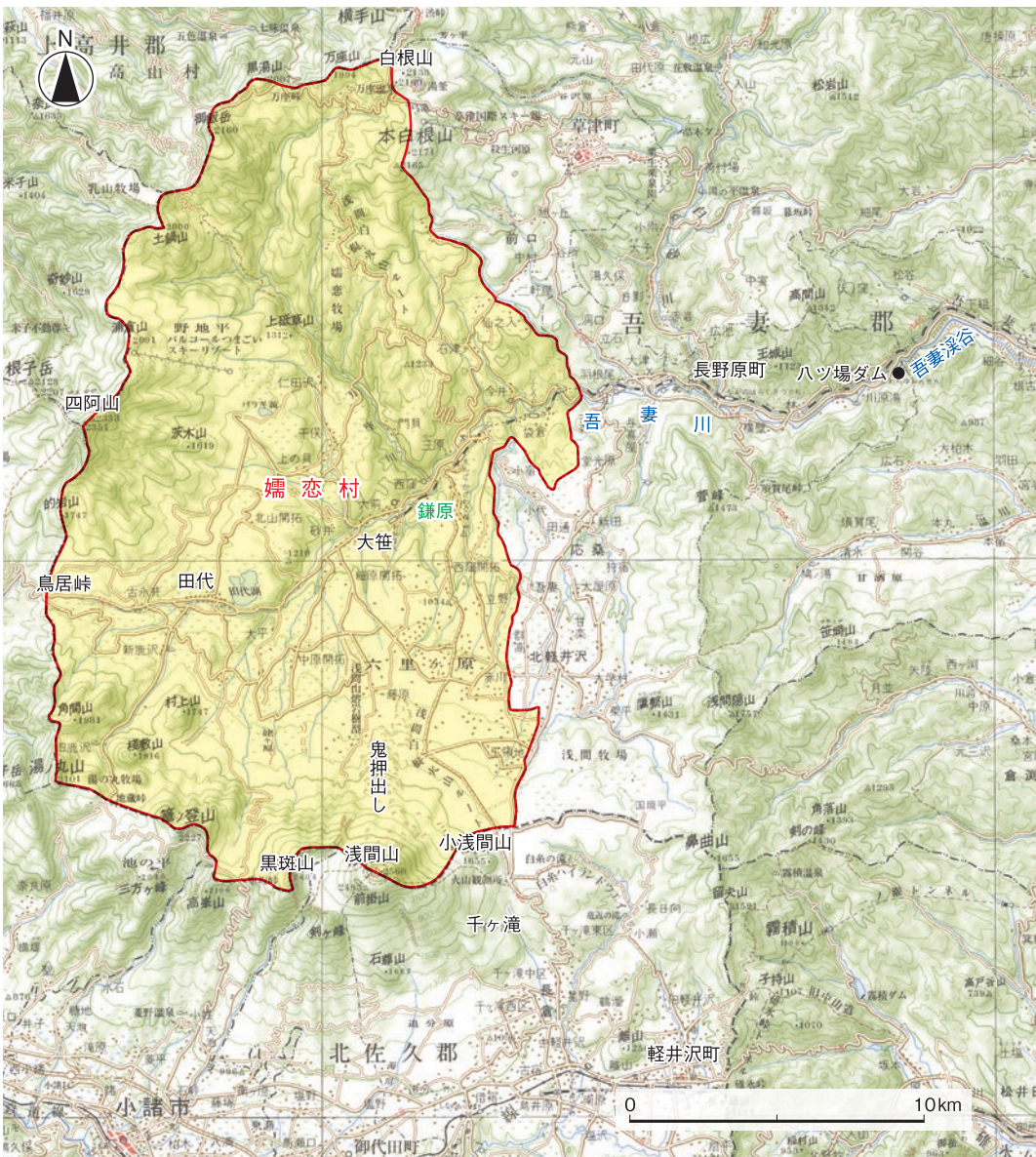
01 高原の村・嬬恋村

嬬恋村は、南に浅間山、西に四阿山、北に草津白根山と三方を標高二〇〇〇メートルを超える山々にかこまれた、群馬県西端にある高原の村です。

それぞれの山裾が重なる村の中央部には、長野県境の鳥居峠近くの田代に源を発する吾妻川が、山々から小河川を集めて東流していきます。その流れは途中、長野原町の八ッ場ダム、その先、東吾妻町にまたがる吾妻渓谷を通り、渋川市で利根川と合流します（延長七六キロメートル）。

村の人口は約九千人、おもな居住域は標高八〇〇から一二〇〇メートルの高地にあり、平均気温は八度前後と北海道札幌市に気象環境が近い村です。村の三分の二が上信越高原国立公園に含まれている嬬恋村は、豊かな自然に恵まれた観光地であるとともに、豊かな大地で育て上げられる高原野菜の産地として発展を続けています。

この嬬恋村の鎌原地区（旧鎌原村）は、一七八三年（天明三）に、浅間山大噴火により壊滅的な被害を受けた場所です。しかし、生き残った村の人びとは悲しみを乗り越え、団結して、村を復興させてきました。



●浅間山と嬬恋村

02 浅間山

浅間山（標高二五六八メートル）は今でもたびたび噴煙をあげる活発な活火山として知られています。同じ場所で噴火活動をくり返して火山体が形づくられる「複成火山」と呼ばれる火山です。

この地にはもともと一〇万年前には黒斑火山という大きな火山がありました。それが二万四〇〇〇年ほど前に山体崩壊をおこす大規模な噴火活動があり、周囲に広大な山裾や泥流丘と呼ばれる山をつくりました。山体崩壊の跡が現在の浅間山の西側に黒斑山という名前の外輪山として残っています。一方、東側では二万〜一万三〇〇〇年前に仏岩火山の活動で小浅間山という溶岩ドームができました。

その後、活動を続けて成長したのが前掛火山、現在のいわゆる「浅間山」です。日本の代表的な活火山の一つとして知られる火山で、天明三年の噴火は関東地方周辺で起こった大規模な噴火の中では最も新しい事例とされています。

現在、嬬恋村から南を望むと、西に黒斑山、真ん中に浅間山、

そして東になだらかな裾野が伸びて、その端にぴよこんと小浅間山の稜線が見わたせます。その景観は、頭を西にした巨大な観音様が天を仰ぐ堂々たる姿になぞらえて、「寝観音」と呼ばれます。

こうした浅間火山の噴火と崩壊の活動史によりつくられた浅間北面山麓は、「鎌原平」とも呼ばれる、なだらかで広い裾野の台地を形成しています。



●上空より見た浅間山（北東より）
火口右手に山の残がいのように見えるのが黒斑山。現在活動中の火山は前掛火口と呼ばれています



●嬬恋村から見た浅間山
右手（西）から黒斑山、浅間山、小浅間山と続く稜線はまさに「寝観音」です

03 噴火の実相

天明三年の浅間山の噴火活動は五月に始まり、八月五日の大噴火にいたる三カ月におよぶものでした。

五月八日（旧暦四月八日）に鳴動と複数方向への降灰をくり返し、八月二〜四日（旧暦七月五〜七日）の連続した活発な噴火活動に推移し、東南東方向に大量の軽石と火山灰を降下させました。

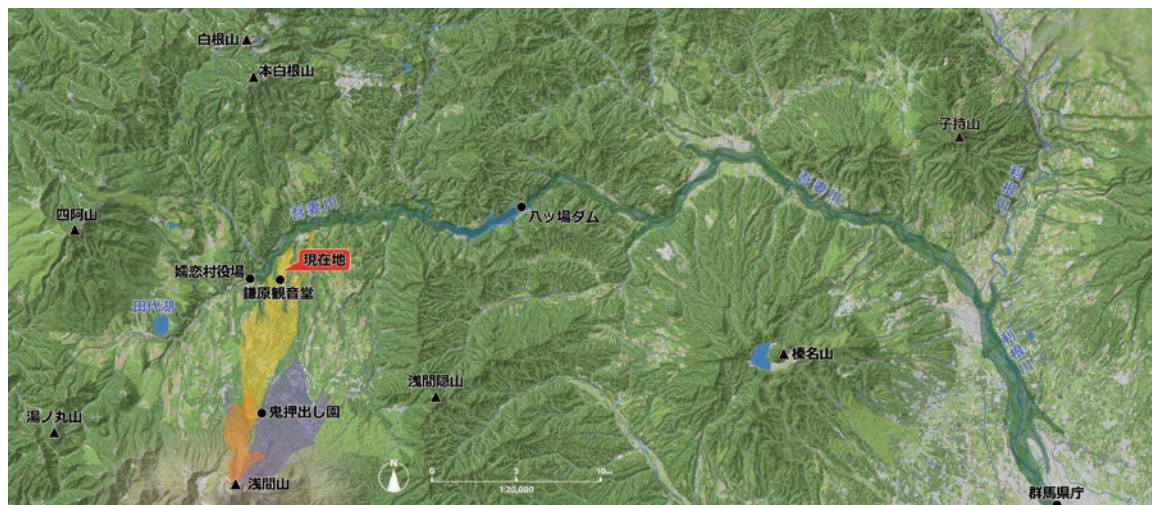
そして四日夜から翌早朝に噴煙柱をとまぬ最大規模の噴火があり、火砕流やおびただしい降下物をもたらしました。安山岩質のマグマ〇・五立方キロメートルが噴出したと考えられています。

さらに八日午前には、浅間山の北麓で爆発音とともに「土石なだれ」が発生し、土砂は群馬側へ流れ下り、鎌原村を埋没させ、吾妻川に流れ込みました。そして、この土砂は「天明泥流」と化して吾妻川を一気に流れ下り、利根川へも流れ込み、

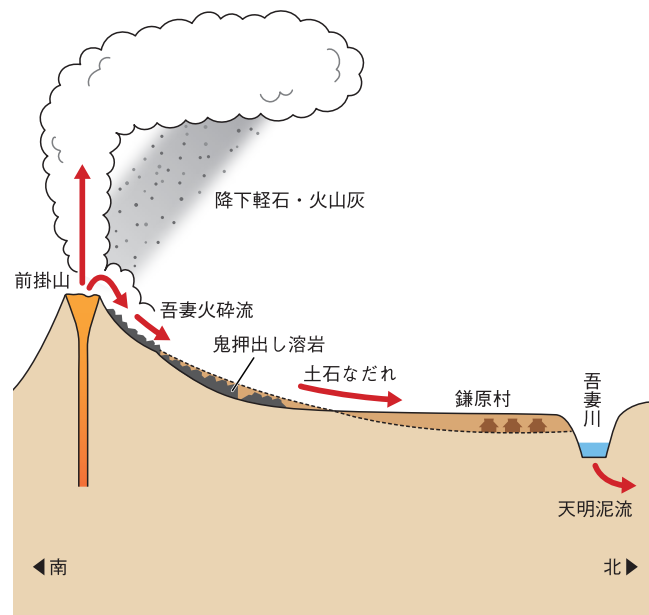
江戸や銚子にも達したといえます。

つまり、この時の噴火活動はつぎの噴出物と現象から説明することができます。

- ① 吾妻火砕流 八月四日夜から翌朝にかけて噴煙柱をとまぬ最大規模の噴火で発生した火砕流。幾重にも流れがあり、その痕跡は火口から扇形に広がっています。人家があるところまでは到達しませんでした。火砕流にのみ込まれた樹木の痕跡が「浅間山熔岩樹型」として知られています。
- ② 土石なだれ 発生場所は現在の鬼押し出し園付近と考えられており、最近の研究では、火砕流ではなく、噴火により既存の土砂が地滑りのような形で流れ出したのではないかと考えられています。
- ③ 鬼押し出し溶岩 非常にゆつくりと火口から斜面を流れ下った溶岩で、②土石なだれで土砂が抜けた窪地を埋めて、その痕跡を隠してしまっていると考えられています。
- ④ 天明泥流 ②土石なだれは鎌原村を埋めただけでなく、吾妻川上流側から大堀沢く小宿川間約六・二キロメートルの範囲で吾妻川に流れ込み、天明泥流として流れ下っていききました。
- ⑤ 降灰 おもに東南東方向、軽井沢から高崎、そして江戸方面の広範囲に、軽石と火山灰が大量に降りました。降灰の被害は当時の中山道沿いと重なります（21頁の図参照）。



●「天明三年浅間山噴火現象の推移」（嬭恋郷土資料館プロジェクトマッピング）
紫色が吾妻火砕流、黄色が土石なだれ、橙色が鬼押し出し溶岩、緑色が天明泥流です



●天明三年浅間山（前掛山）大噴火の現象